

# 博物館ニュース

徳島県立  
博物館

No.89

## 園瀬川ではじめての発見 絶滅危惧種「カジカ」



カジカ小卵型しょうらんがた（園瀬川産）そのせがわ 標本番号TKPM-P 17337

この写真の個体は、博物館のすぐ前の園瀬川において、今年の7月28日に採集されたものです。博物館では毎年この時期この場所で、野外自然かんさつ「川魚かんさつ」を行っているのですが、今回初めて参加者の夕モ網あみに入りました。吉野川水系としては約40年ぶりの確認、園瀬川としては初記録となりました。

小卵型カジカの生息地は、現在、四国では那賀川なかがわ下流域だけです。小卵型は回遊魚かいゆうぎょで冬に川で産卵し、仔魚はいったん海に下り、春に再び川に上がってきます。あまり移動するとは考えられないのですが、今回の園瀬川のカジカは、那賀川で生まれた個体が上ってきたのかもしれませんが。

めずらしい  
魚なんだね



（動物担当：佐藤陽一）

# 徳島県の外来植物

茨木 靖

「まるで緑の絨毯みたいだ！」。旧吉野川の水門にたどり着いたとき、思わずこう叫んでいました。船の周りは川のはすなのに、ボタンウキクサに埋め尽くされて、まるで陸地のように見えたのです（図1）。ボタンウキクサは、世界の熱帯域に広く分布する水草で、大正末から昭和初期には日本に入ってきたとされます。

このように、外国などからその地域に入りこんで野生化してしまった植物を外来（帰化）植物といいます。県内には、1990年に出版された徳島県植物誌によると、その時すでに308種類もの外来植物が存在していたことが記録されています。その後も、アメリカカニツリ、ナンカイヌカボ、ナンゴクヒメミソハギ、ニセアゼガヤ、アレチキンギョソウ、ナンカイヌカボ、ホウキヌカキビ、セイヨウウキガヤな

ど、新参外来植物の発見は、いっこうに収まる気配がありません。

## どうやってやってくるの？

外国の植物が日本に入ってくるルートには、羊毛など積み荷に付着して港にもたらされるもの、輸入牧草種子や餌と共に牧場に入り込むもの、園芸用土に混入するもの、観賞用植物を捨てたり植えたりしたものなどがあります。とくに近年では、道路の法面緑化のために日本国産と同種の外国産植物の種子が多く用いられ、外来種の侵入ルートの一つになっています。法面への種子の吹きつけは、自然度の高い山中などに直接外来種が侵入するので、自然環境に与える影響も大きいとされます。

## 外来植物の影響は？

外来植物の影響としては、ボタンウキクサのように水面全体を覆い尽くすなどして、在来種の生育する場所を奪う、それまで国内に無かった病気や害虫を外国から持ち込む、畑や田んぼで大繁殖して農作業に影響を与えるなどの問題があります。また、外来種が元々あった在来種と交雑し、遺伝的な汚染が起きてしまうことも深刻な問題と言えます。具体的には、栽培種のキクが、在来のシオギクと交雑してしまっていることが知られています。



図1 ボタンウキクサ

## 外来植物による社会的ダメージと特定外来生物

近頃では、特定の外来種が爆発的に増殖し、大きな経済的影響を起こすといった社会問題も報道されるようになってきました。例えばボタンウキクサなどでは、増殖した個体を取り除くために、多額のお金が使われたことが、新聞やテレビでも取り上げられました。このような特に社会的影響の大きいボタンウキクサやナルトサワギク(図2)などは、外来生物法(正式名称:特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)によって、特定外来生物(同法が定める、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがある外来生物のこと)に指定されていて、栽培、保管、輸入、譲渡そして、野外に捨てることなどが禁止されています。



図2 ナルトサワギク

## 国内外来生物

外来種と言えば、外国からやってくる植物のように思われがちですが、国内の他の地域から持ち込まれる植物(国内外来生物)も、同じように大きな影響を与える可能性があります。国内からの移入の場合、その植物が徳島県の在来種か外来種かを特定しにくいですし、さらに在来種と同種の場合は、両者の交雑により遺伝的な汚染が起こる可能性も考えられます。例えば、

佐那河内村で見つかったエゾヌカボ(図3)は、本来北海道から東北地方にのみ分布する植物で、本県には存在しないはずですが、これを客観的に外来植物であると証明するためには、とても多くの労力が必要になります。



図3 エゾヌカボの標本

## まとめ

現在、日本国内には、1200種以上ともいわれる帰化植物があるとされています。日本には、シダ植物も含めるとおよそ4500種の植物があるとされていますので、帰化植物の占める割合の大きさが改めてわかるでしょう。外来種に対しては、常に新しい情報の収集を行うことと、その影響の正しい判断と対応、そして、必要によってはその除去などの適切な対策が求められます。

(植物担当)

外国から  
いろんな植物が  
入り込んで  
いるんだ!





# 鳴門市千鳥ヶ浜に漂着した イチョウハクジラの解剖調査

2012年9月5日、鳴門市大毛島の鳴門海峡に近い千鳥ヶ浜に1頭のクジラが漂着しているのが発見されました。当初、普通種のツチクジラとされていたのですが、マスコミ報道を見た国立科学博物館の山田格脊椎動物研究グループ長が、希少種のイチョウハクジラの可能性が高いことに気づき、急きょ現地で合同の解剖調査を行うことになりました。その様子をご紹介します。

今回、現地で解剖したイチョウハクジラは、骨はすべて回収し、当館で組立骨格標本として保管することになりました。骨髄中の油を抜いたり、骨格をきちんとくみ上げたりするために、1年ほどかかる予定ですが、完成したら皆さんにお目にかけてしたいと思います。

(動物担当：佐藤陽一)



図2 体表面の様子。円形の白いまだら模様は、深海性の小型ザメ・ダルマザメに噛まれて治癒した跡です。

図1 漂着したイチョウハクジラ(2012年9月6日)。インド洋から太平洋の熱帯・温帯に分布するアカボウクジラ科の一種で、発見例が少ないことから、生態がよくわかっていません。もっとも報告が多いのは日本で、それでも漂着の事例はせいぜい10数例程度です。



図3 解剖のため波打ち際から重機で解剖サイトまで移動させます(2012年9月7日)。体長4.8mのオスの成獣でした。



図4 イチョウハクジラの名前の由来は、オスの成獣の下あごに1対のイチョウの葉に似た形の歯があるためです(メスには歯がありません)。しかし、肉が付いている状態では、歯の先端がわずかに出ているだけなのでほとんどわかりません。

図5 内臓はすべて取り出して、国立科学博物館の研究室に持ち帰り、あとで詳しく調べます。その他に、各組織もサンプリングして愛媛大学の研究グループが環境汚染の調査のため持ち帰りました。



図6 取り出された腸管です。あとで内容物を調査します。

# 絶滅危惧種 **ハマグリ** とその **近縁種**

ハマグリ(図1)は日本の干潟を代表する二枚貝のひとつです。1980年代以降、生息地の埋立や汚染、過剰漁獲によって各地で消滅・減少し、漁獲量は1970年代の20%～5%以下になっています。今年、環境省が発表した第4次レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されました。

ハマグリのなかま(ハマグリ属)のうち、本州～九州に自然分布しているのは、ハマグリとチョウセンハマグリです。このほかに朝鮮半島や中国大陸沿岸部原産の外来種であるシナハマグリがあります。この3種の特徴を簡単にまとめておきます。

## ハマグリ *Meretrix lusoria* (図1)

本州北部～九州南部および韓国南部の砂質干潟に分布しています。殻は薄く、丸みを帯びた三角形で光沢があります。斑紋は多様です。熊本県の有明海南部や三重県の伊勢湾などが現在の主要産地です。県内では吉野川の干潟などに生息し、徳島市内の鮮魚店で販売されていることがあります(図2)。



図1 ハマグリ。熊本県産(熊本市内の鮮魚店で購入)。



図2 徳島市内の鮮魚店で販売されていたハマグリ(2003年12月撮影)。

## チョウセンハマグリ *Meretrix lamarckii* (図3)

外海に面した砂浜の潮間帯～潮下帯に生息しています。殻は厚く、ハマグリより横長で、より三角形に近い形をしています。斑紋は単調で、模様のない個体も多く見られます。茨城県の鹿島灘や宮崎県日向市が主要産地です。徳島県南部の海岸では貝殻を拾うことができます。

## シナハマグリ *Meretrix petechialis* (図4)

ハマグリと同様、河口や内湾の干潟に生息しています。全体的に形が丸く、光沢は貧弱です。赤褐色の斑点やジグザグ模様がよく見られます。吉野川の河口を含む各地の干潟で放流され、ハマグリと交雑を起こしているとの報告があります。食料品店などで見かける「はまぐり」の多くは本種です。

(地学担当：中尾賢一)

参考文献：内野明德(編). 2009. 肥後ハマグリの資源管理とブランド化. 成文堂.  
日本ベントス学会(編). 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑. 東海大学出版会.



図3 チョウセンハマグリ。宮崎県日向市産(宮崎県内の鮮魚店で購入)。



図4 シナハマグリ。原産地不明(徳島県内のスーパーマーケットで購入)。

どれもよく似ているね





# かどまつ 正月の門松いろいろ



みなさんの家では、お正月を迎えるにあたって、どんな飾りつけをしましょうか？

家の玄関や窓、出入り口に注連飾りをつけている所は、徳島市内でもよく見かけます。ただ、玄関や門に、門松のような飾りをしている家はあまり見かけないように思います。

門松はもともと、新年を迎えるにあたって、神様がそこに訪れてくれるようにと願い込めて、飾るものだったとされます。古くは、必ずしも松を飾っていたわけではなく、地域によっていろいろな常緑樹を立てるものでした。松が多く用いられるようになったのは、平安時代、後三条天皇（在位期間 1068～1073年）の頃とされています。

この門松について、県内をあちこち見て回った所、近年でも家の門に、門松やそれに当たる飾りをしている所がありました。

たとえば、阿南市桑野町や上中町では門の両脇に笹竹を立てて、そこに長い注連飾りを渡している家があります（図1）。



図1 阿南市桑野町（写真提供：西崎憲志氏）

神山町鬼籠野では、家の門に松の枝を一本立てている家が数軒ありました（図2）。

また美波町赤松では、家の門の両脇に樅の木の枝と榊の枝を立てている家があります。この樅の枝については、左右で異なる種類を立てるとしています。向



図2 神山町鬼籠野の門松

かって右側には「シロカシ」呼ぶ樅を、左側には単に「カシ」と呼ぶ枝を用いていました（図3）。赤松ではもう一つ、門の両脇、あるいは玄関の両脇に松の小枝をつけている家が多くあります。地元の人にお話を聞いてみると、ただ松をつけているのではなく、向かって左は「オンマツ（雄松）」という松葉の先が固いもの、右は「メンマツ（雌松）」という松葉の先が柔らかい松をつけることになっているそうです（図4）。



図3 美波町赤松（写真提供：栗作幸晴氏）



図4 美波町赤松の門松（左：雄松 右：雌松）

飾りつける手間があること、伝えられてきた種類の木の枝を入手することが困難になってきたことなどから、正月の門松の風景はどんどん目にする機会が少なくなっています。けれども、実際に飾っている所を見て、単なる正月の飾りとしてだけでなく、地域や家によっていろいろな植物が使い分けられ、細かなしきたりがあったと気づきました。

紹介したものの他にも様々な様式の門松があるかと思います。何か情報がありましたら、是非博物館にお知らせください。

（民俗担当：庄武憲子）



# 文化の森に古墳があると聞きましたが、どこにあるのですか？

文化の森の古墳は近代美術館の東側、北へ張り出した尾根の先端近くにありました。地名から向寺山古墳と呼ばれています。現在、尾根先端部は削り取られ、公園の園路となっています(図1)。文化の森がつけられた場所は、徳島藩の家老長谷川氏の別荘で、延生軒跡として知られています。文化の森の建設工事に先立って発掘調査され、江戸時代の屋敷跡のほかに、古墳や古墳時代中期後半の土師器、須恵器、製塩土器なども発見されました。

2基の組合式箱形石棺がほぼ直角に接して見つっています。2基ともに、長さ2m、幅0.4m、深さ0.3m程度です。岩盤を削り出して石棺を設置し、石棺に蓋石をかぶせた後、その上に石を積んでいます。石棺及び積石の石材はすべて緑色片岩(青石)が使われています(図2)。底面は掘り込んだ岩盤そのまま、箱形石棺の内部からは、人骨や副葬品はまったく発見されませんでした。盛り土による墳丘は認められませんが、墳丘を区画していたと考えられる石列が確認されています。

緑色片岩(青石)を使った組合式箱形石棺は阿波型石棺と呼ばれたこともあり、広く徳島県に分布しています。文化の森周辺・園瀬川流域でも、石棺を持つ古墳群が数多く見つっています。なかでも眉山南麓の恵解山古墳群、「七つ山」と呼ばれる独立丘陵上の犬山天神山古墳群、地蔵橋駅周辺の通称「とっくり山」に立地していた鶴島山古墳群などが有名です。恵解山古墳群には、箱形石棺や竪穴式石室を埋葬

施設とするものが7基あります。墳丘は10m前後の小さなものばかりですが、短甲や衝角付冑、鉄刀、鉄剣、鉄鏃など特色のある武器・武具類が大量に副葬されていました。犬山天神山古墳群からは11基、鶴島山古墳群からは8基の箱形石棺等が見つっています。ともに少量の鉄製品などしか副葬されていませんでした。この二つの古墳群には人骨が残っているものもあり、人骨は水銀朱によって真っ赤に彩られていました。この三つの古墳群は、ほぼ5世紀代につくられたと考えられています。

これらの古墳群も向寺山古墳と同様にその姿を消してしまいました。恵解山古墳群は宅地開発によりすべて壊されてしまい、9号墳だけが近くに移築保存されています。犬山天神山古墳群は南環状線の道路によってその立地する山の南半分が削り取られています。鶴島山古墳群は、住宅団地の建設により立地する山全体が削り取られ平地となっています。

向寺山古墳は、古墳がつけられた当時の地形がまだ残っています。側を通ったときには、箱形石棺を持つ古墳がこのあたりに在ったことを思い浮かべてください。(館長：高島芳弘)

文化の森にも古墳があったんだね



図1 向寺山古墳の在った場所(近代美術館の東側)



図2 向寺山古墳の調査風景(1985年)徳島県立埋蔵文化財総合センター提供

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	申込	対象(定員)	備考
部門展示関連行事	部門展示「ミニ鉱物展」展示解説	1月14日(月・祝)	14:00~14:30	不要		常設展の観覧料が必要です
	部門展示「身近な草木で紙づくり・簪 <small>かんざし</small> と櫛 <small>くし</small> 」展示解説	3月24日(日)	13:30~14:30	不要		常設展の観覧料が必要です
ミュージアムトーク	徳島県の屋根瓦	1月20日(日)	13:30~15:00	不要	中学生から一般(50)	
	谷田忠兵衛の謎	1月27日(日)	13:30~15:00	不要	小学生から一般(50)	
歴史体験	小中学生のための昔の道具調べ講座	2月17日(日)	13:30~15:00	要	小学生から一般(30)	
野外自然かんさつ	冬の昆虫と植物	2月24日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(20)	
室内実習	アンモナイト標本をつくろう	3月3日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(20)	材料費 300円 (大学生・一般)
	落ち葉の中の生きものたち	3月17日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(20)	
歴史散歩	縄文の谷ハイキング(三加茂)	3月24日(日)	10:00~15:00	要	小学生から一般(20)	現地集合

◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。

### 普及行事のお申し込みについて

- ◎1枚の往復はがきには、1行事だけにしてください。
- ◎行事日の1ヵ月前から10日前までに必着で右記までお申し込みください。
- ◎返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入しておいてください。
- ◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳しいことは当選された方にお知らせします。
- ◎原則として、参加費は無料です。

#### 往復はがき記入例

<往信の表面>	<返信の裏面>	<返信の表面>	<往信の裏面>
50 〒770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館	何も書かないで ください	50 〒□□□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1.参加希望の 行事名 2.参加希望者 全員名(学年) 3.住所 4.電話番号

※お問い合わせは、徳島県立博物館 普及係へ(電話 088-668-3636)

## 博物館Vキング

日時：2013年2月11日(月・祝)

会場：博物館常設展示室(2階) ※参加無料

博物館ボランティアスタッフを中心に、楽しいイベントを行います。多数の方のご来館をおまちしております。

催し物(予定)

- ポップアップ絵本
- クイズラリー
- ブンブンごま
- テントでカメラ



「博物館Vキング」昨年の様子



## 博物館友の会 行事のご紹介

2012年8月、友の会行事「キャンプで自然体験」を行いました。

会員21名が参加し、有意義な活動となりました。

<活動場所>

○いきものふれあいの里キャンプ場(佐那河内村)

<活動内容>

- 動植物の観察
- バーベキュー
- 昆虫のライトトラップ

### ◆2012年度の今後の行事予定

- 1月(日は未定) ういろう・うどん作り(実習)
- 2月(日は未定) 藍染め体験



「キャンプで自然体験」の参加者のみなさん

くわしくは友の会事務局まで(電話 088-668-3636)